

「情報倫理の構築」プロジェクト 第2回 国際ワークショップ(FINE2001)

「情報倫理の構築」プロジェクトでは、今年2月27日28日の両日、リーガ・ロイヤルホテル広島にて、第2回目の国際ワークショップを開催した。本ワークショップは'99年に京都で行った第1回目に次ぐものだが、今回は広島拠点を中心に開催したため、情報倫理と教育をテーマにして、国内はもとより欧米5カ国からもこの分野の第一線の研究者を招き、下記のようなプログラムで開催された。

●2月27日(火曜日)

○挨拶

原田康夫(広島大学長)、水谷雅彦(京都大学、FINEプロジェクトリーダー)

○基調講演

越智 貢(広島大学、FINE コアメンバー)

「いかにしてコンピュータ倫理学はこどもたちの教育に貢献しうるか」

○第一部：情報倫理と教育

J.ムーア(ダートマス大学、米)「コンピュータ倫理教育における徳の重要性」

J.ヤンス(ティルブルグ大学、蘭)「ヴァーチャルヤヌスの取り扱い—学校でのコンピュータ倫理教育のための礎石—」

L.イントローナ(ランカスター大学、英)「正義と責任：コンピュータと情報の倫理を教える(教えない) ことについて」

江口 聡(京都女子大学)「学校教育におけるプライバシーの重要性」

○基調講演

D.ジョンソン(ジョージア工科大学、米)「インフォメーション・テクノロジーと教育目標—ハンマーのための釘の作成—」

●2月28日(水曜日)

○第二部：情報倫理の諸問題

H.タヴァーニ(リヴィエール大学、米)「コンピュータエシックスコースを教える：議論的となる議題、カリキュラムの挑戦、現在の方法」

P.ブレイ(トウェンテ大学、蘭)「大学カリキュラムにおける社会的・倫理的IT研究の役割」

板井孝一郎(京都大学)「電子カルテとプライバシー保護—患者教育システムとしての医療情報システムとは—」

○第三部：情報倫理の基礎論

村田 純一(東京大学)「技術と倫理—技術の本性と解釈の柔軟性—」

柏端 達也(千葉大学)「仮想コミュニケーション空間における『われわれ』—哲学的、倫理的的分析—」

H. ハステット(ロストック大学、独)「情報の倫理はいかにして可能か」

M.ギョーム(パリ・ドーフイネ大学、仏)「新技術と教育：期待と危惧」

○挨拶：土屋俊（千葉大学、FINE コアメンバー）

各報告の詳細な内容は、後日刊行される報告集をご参照頂くことを期待して、ここでは私が本ワークショップ全体を通して注目すべきと思われた論点を整理する形で報告させていただく。

まず、越智、ムーアの報告では、情報倫理教育以前に日常的道德を身につけておくことが、情報倫理教育を行う上での前提であるという点が確認されていた。これは当たり前のようでありながら、従来の情報倫理教育が、いわゆるネットワーク上のエチケットや安全教育に偏重することで、日常的な道德やコンピュータ利用のあり方を導く上位価値との関連性を看過しがちであったことを思えば、重要な論点といえよう。それに関連して、村田は、技術と社会との独立性を前提とし、技術が社会にもたらした帰結としての問題のみを扱うような「後始末」としての応用倫理学ではなく、積極的に技術の開発と発展に関与する倫理学のあり方として、「何がよい生活か」などの基本的価値の視点から、技術と社会の間で何が問題なのかを教育することの必要性を述べる。ハステットも、情報倫理の核心的な問いは、我々はどのように情報と関わる生を欲しているかであり、人が技術との関連で自分たちの生き方に反省を加えることができるためには、教育が重要だとした上で、情報倫理の教育の目的の一つは、情報を調達する能力を、深く思慮する能力と結合させることにあり、そのためいわゆる「教養」の教育が重要だという。（それに関連して、ヤンスは、インターネット技術の利用によって私たちが忘れてしまいがちな、データと情報、あるいはコンタクトとコミュニケーションの違いなどに言及している。また、ギョームも電子的研究と人格的接触・交流の間の緩和を図ることの重要性を指摘している。さらにブレイも、中等教育では社会における情報コミュニケーション技術の役割について理解させることだ重要だという。）また、ジョンソンも、われわれが情報技術を利用するために教育の目標をそれに適した形に変えようとしており、それによって情報技術との関係の薄い教育の主要な目標を軽視しがちであると警告している。

このように、情報倫理とその教育にとって肝要なのは、いわゆる情報化を我々がどう捉えるか、それをどう主体的にコントロールできるようにするかという点で、情報化を社会的文脈の中に適切に位置づける上位の視点・価値観の研究・教育であるという点で、多くの論者の指摘には共通している。それは情報倫理研究のレベルでも、またその教育のレベルでもそうである。また、専門家と素人が平等に参加できる「公的空間」を作ることが必要だとする村田の指摘や、学校内でのネットワークの運営ポリシー、プライバシー保護のあり方については、管理者ではなく利用者の視点から見直される必要があり、さらにそれに関する教育も必要だとする江口の指摘は、上記のことを実践するための方策を示すものと理解できる。

上記以外にも、多くの有益な示唆や問題点の指摘があったことはあえて言うまでもないが、逆に上記のように多くの論者に共通する示唆やそれに関連する指摘が見出されたこと、それが情報社会を導く上位価値のあり方の問題であり、情報教育との関連で言えば、情報社会を反省的に捉える能力を身につけるための教育の重要性の指摘のとして理解しようというのが、このフォーラム全体を通じた私なりの収穫である。

（坪井 雅史）